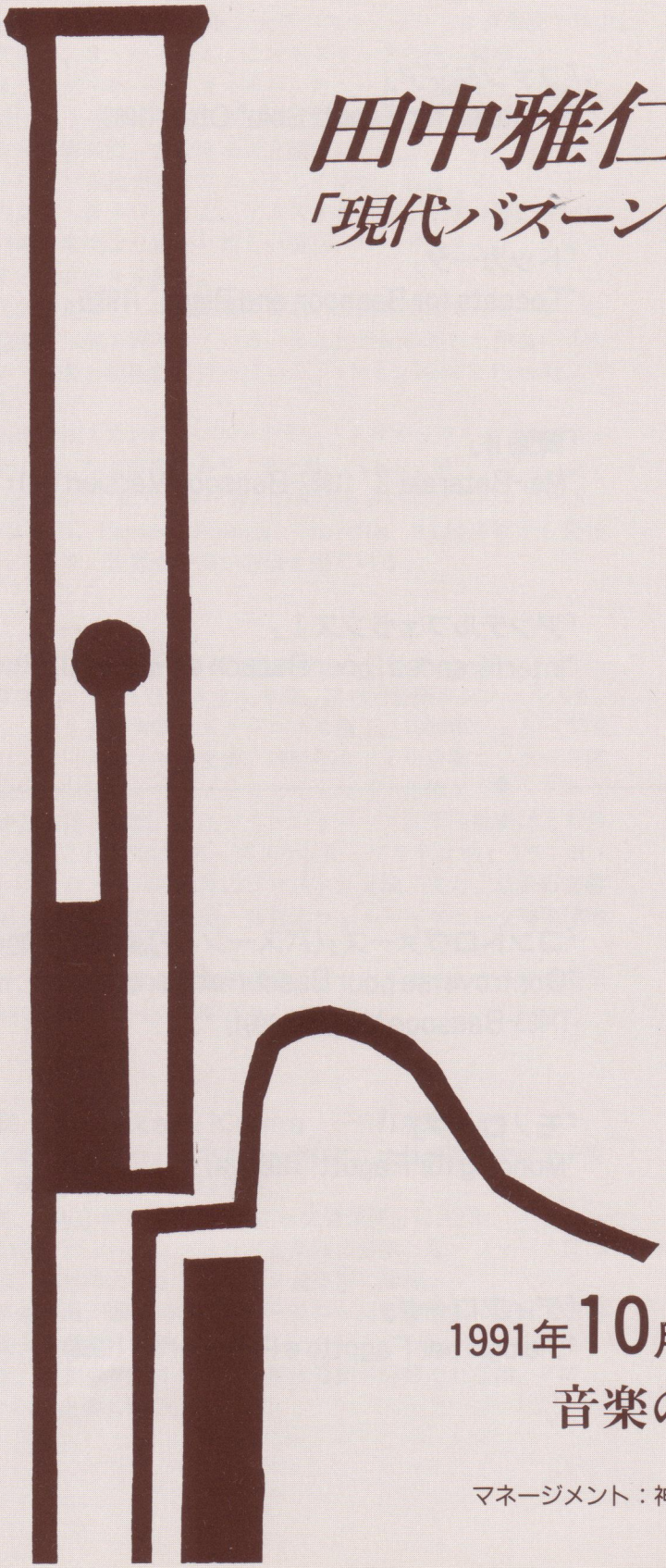
Masahito TANAKA Contemporary Bassoon Music

平成3年度文化庁芸術祭参加

田中雅仁リサイタル
「現代バスーン音楽Ⅱ」



1991年10月18日(金) 7:00P.M.

音楽の友ホール

マネージメント：神原音楽事務所 (03)3403-8011

Programme

フランク・ミヒャエル
Frank Michael (b.1943)
本邦初演

「ファンタジア」
"Fantasia für Fagott Solo" Op.57 (1983)

ケース・オルトハイス
Kees Olthuis (b.1940)
本邦初演

「トッカータ」
"Toccata for Bassoon and Piano" (1989)

湯浅譲二
Joji Yuasa (b.1929)
本邦初演

「舞働Ⅱ」
"Mai-Bataraki Ⅱ" (1987-Bassoon Version 1991)

ロジェー・ブートゥリー
Roger Boutry (b.1932)

「アンテルフェランスⅠ」
"Interférences I pour Basson et Piano" (1972)

ジャクリーヌ・フォンタイン
Jacqueline Fontyn (b.1930)
本邦初演

「コントロヴァーズ」(バスーンと打楽器のための)
"Controverse pour Basson et Percussion"
(1983-Bassoon Version 1991)

イサン・ユン
Isang Yun (b.1917)
本邦初演

「モノローグ」
"Monolog für Fagott" (1983/84)

ミクロス・コサール
Miklós Kocsár (b.1933)
本邦初演

「ディアローグ」
"Dialoghi per Fagotto e Pianoforte" (1968)

Profile

田中雅仁　Masahito Tanaka ――バスーン――

1951年東京生まれ。
桐朋学園大学（音楽賞）、ニューイングランド音楽院（Master of Music）卒業。後、ボストン大学、スウェーリンク音楽院で学ぶ。
戸沢宗雄、S・ウォルト、J・モスタード各氏に師事。
「オランダ・ハーグ・フィルハーモニー」、「南西ドイツ放送交響楽団」、「ベルギー国立歌劇場交響楽団」、「新日本フィルハーモニー交響楽団」各首席奏者を歴任。
ヨーロッパ各地でもソリストとして活動。放送、オーケストラとの共演も数多い。また、アムステルダム、オスロ等、ヨーロッパの音楽院より招かれ新しい奏法、リード・メイキングのマスター・クラスを開く。
現代曲演奏家としても国際的に高い評価を受けており、多くの作曲家から曲を贈られている。また19世紀の埋れた作品のリサーチ・発表も積極的に行っている。（ドイツBote & Book社より出版）
室内楽では「アンサンブル・ラミ」、「トリオ・ラミ」、「トリオ・カラムス」の主宰者であり、またM・ペトリ、M・アリニョン、P・ピエルロ、R・ギヨー等との共演も多い。ソロのレコード、CDはEMI、Pavane、Astoria、Thorofon、ALM各社から発売されており、世界中で高い評価を得ている。

児嶋一江　Kazue Kojima ――ピアノ――

東京芸術大学、及び同大学院卒業。第44回音楽コンクール入賞。ミュンヘン音楽大学マスターコース修了。1980年ジュネーヴ国際コンクール銅メダル受賞。1981年全ドイツ音楽コンクール第１位。1984年ライプツィヒにてK・マズア指揮ゲヴァントハウス管弦楽団と共演。またゲヴァントハウス弦楽四重奏団とも共演する。これまでに、K・ズスケ、R・ヴラトコヴィッチ、R・モーク、P・ダム等内外のソリストと共演、また、京都市交響楽団、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団等とも共演している。
現在、東京芸術大学非常勤講師、コンセルヴァトアール尚美学園ディプロマコース講師。

小島　光　Hikaru Kojma ――打楽器――

1952年東京生まれ。桐朋学園大学にて、小林美隆、安部圭子両氏に師事。1975年、同校卒業。
同年、「新日本フィルハーモニー交響楽団」に入団。
1980年、ニューイングランド音楽院に留学、E・ファース氏に師事。1981年、タングルウッド音楽祭に参加。
同年帰国後、「新日本フィルハーモニー交響楽団」に復帰。昭和音楽大学講師に就任。
現在、打楽器アンサンブル、現代音楽各分野でも活動、FM、TVへの出演も多い。

Programme notes

Eva Weisse
エヴァ　ヴァイセ

■「ファンタジア」(1983)　　フランク・ミヒャエル (b.1943)

ミヒャエルはライプツィッヒ生まれであるが、音楽教育はフランクフルト（アム・マイン）でうけている。フルートと作曲を専攻しており、作曲家として数々の賞を得るとともにフルート奏者としての活動も積極的に行っている。この「ファンタジア」は７つの楽章で構成されており、四分音、グリッサンド、重音などの特殊奏法がふんだんに取り入れられているが、作品全体は決してアグレッシヴなものではない。現代ドイツの作品としては最も早く重音をとりいれたものの一つである。

■「トッカータ」(1989)　　ケース・オルトハイス (b.1940)

オルトハイスのキャリアはまずバスーン奏者としてはじまった。ハーグ・フィル等いくつかのオーケストラを経て、現在は「コンセルトヘボウ管弦楽団」のメンバーである。作曲家としては現代オランダを代表する一人であり、ハイティンクの委嘱による「Jour de fête」や「Theseusphantasy」は繰り返し演奏されている。また、オペラでは「鵞鳥」が代表作である。「トッカータ」は彼の多くの作品と同じように、特殊奏法を用いず、オーソドックスなスタイルで書かれており、現在オランダでは最も演奏回数の多いバスーン曲である。

■「舞働（まいばたらき）Ⅱ」(1991)　　湯浅譲二 (b.1929)

この曲の原曲は能管のために作曲されたもので、1987年、赤尾三千子氏によって、ロサンジェルスで初演された。同年作曲者自身によってアルト・フルート用に書き直されたものを、今回さらにバスーンのために書き改めたものである。能管の音階特有の微分音が多用されており、グリッサンドも多い。後半、12小節の長いフレーズが３回アッチェレランドを伴って繰り返され、MM＝54から 132 までの息の長いセクションになっている。バスーンのための新しいレパートリーとして、極めて興味深いものである。

■「アンテルフェランスⅠ」(1972)　　ロジェー・ブートゥリー (b.1932)

ブートゥリーは現在パリ国立音楽院・和声学の教授であるが、ピアニスト、また指揮者としても活躍しており、1973年より「ギャルド・レピュブリケーヌ」の常任指揮者をつとめている。また1954年には、自作のカンタータがローマ大賞を受けている。「アンテルフェランスⅠ」は1972年、パリ音楽院バスーン科の卒業試験課題曲として作曲され、M・アラールに捧げられた。バスーンとピアノの２つの波が互いにぶつかりあいながら、つまり“interfere”しながらこの曲を構成している。サクソフォーンを思わせるバスーンの華やかな動き、高音域ののびやかなメロディーはこの曲の大きな特徴といえる。20世紀フランスのバスーン音楽を代表する作品である。

■「コントロヴァーズ」(1991)　　ジャクリーヌ・フォンタイン (b.1930)

フォンタインはアントワープに生まれた現代ベルギーを代表する作曲家である。ブリュッセル、パリ、ウィーンで学び、1970～90の20年間ブリュッセル音楽院の教授をつとめた。ヨーロッパ、アメリカで数多くの賞をうけており、最近ではワシントンのクーセヴィツキー財団から表彰されている。1976年には、エリザベート国際コンクールの課題曲として、彼女の代表作の一つである「ヴァイオリン協奏曲」を書いている。この「コントロヴァーズ」は1983年クラリネットと打楽器のために書かれたものであるが今回、バスーンのために書き直された。フォンタインの他の作品と同様に、アトーナルなパッセージの中にも叙情的な表現がみられる。バスーンの広い音域と、重音奏法が効果的に生かされた作品である。

Programme notes

■「モノローグ」(1983/84)　　イサン・ユン (b.1917)

ユンは自身の「クラリネット協奏曲」のモティーフを発展させてこの曲を書いたと語っている。極端な音域と幅広いダイナミクスの使用はユンの音楽の特徴であり、この作品はその好例であるが、夥しい数の装飾音や、独特のヴィブラート（楽譜には指定されていない）の使用は韓国の民族楽器の影響であろう。“ヨーロッパ音楽のヴィブラートは「緩く浅いもの」から「速く深いもの」に移行するのがほとんどであるが、自分の作品には全く反対のものを用いる箇所が多い”とユン自身も語っている。この作品の演奏のためには、最高度のテクニックが必要であり、バスーンのための作品の中でも最も難度の高いものといえる。

■「ディアローグ」(1968)　　ミクロス・コサール (b.1933)

コサールは現代ハンガリーを代表する作曲家である。ブダペスト音楽院でファルカスに師事し、1963年よりマダク劇場の音楽監督をつとめ、1972年には、ブダペスト音楽院の教授となっている。彼の作品は一時、現代ポーランド楽派の影響が強かったが、最近では自身のスタイルを確立している。自国の民族音楽に基づいた作品も多く、ピアノにツィンバロンを模倣させた部分もみられる。この「ディアローグ」は５つの楽章で構成されているが、続けて演奏される。1970年に作曲されたパル・カロリーの「コントルニ」と並んで、現代ハンガリーバスーン音楽の代表的な作品である。

今回演奏される特殊奏法について　　田 中 雅 仁

●重　音

バスーンの重音は主にフィンガリングの組み合わせと、唇、及び息の圧力の変化によるものです。音量・倍音が豊かであるため、バスーンは重音奏法に最も適した楽器といえます。この奏法はイタリアのバスーン奏者Ｓ・ペナッツィの協力を得て、作曲家Ｂ・バルトロッツィが編纂した「New Sources of Musical Expression」によって広まったもので、特に1980年以後に書かれた曲にはよく使われています。バルトロッツィの本には、同時に鳴るいくつかの音の音量差が示されていないことから、誤解されることが多いのですが、全ての音が均等の音量で鳴るわけではありません。音量の大きい２，３の音が音色と響きを決定しています。また、これらの音が接近しているほど「唸り」が大きくなります。

●グリッサンド

バスーンはアンブシュアと息の圧力を変化させることによってピッチが大きく変わります。しかし、下行はほぼ半音動けますが、上行は四分音程度でも困難です。従って、上行のグリッサンドはほとんどフィンガリング（と唇との組み合わせ）によって行われます。グリッサンドが最も効果的にきこえるのは３度音程内で、これ以上のインターヴァルになると不可能な場合もでてきます。

●四分音

四分音の使用は近年ごく当たり前になってきてはいますが、奏法はまだ普及しているとはいえません。バスーンの音程は音量と相互関係にあるので、要求されている音量によって、フィンガリングが異なります。また、フィンガリングの種類は各音10～20種類あり、アンブシュアとの組み合わせによってはその倍以上の可能性があります。

●同音上のトレモロ

これは「単音上のセクエンツ」ということもできます。一定のアンブシュア、息の量で一つの音を吹きながらフィンガリングを変化させ、微妙に異なるピッチ、響きを交互に鳴らすため、フラッター・タンギング（今日では特殊奏法といえない）のような効果が得られます。リード楽器のフラッターは、軟口蓋によるものなので（フランス語のＲの発音と同じ方法）フルートほど効果的ではありませんが、この方法はフラッターより音量のコントロールができ、響きもクリアーなので、大きなホールでも十分使えるものです。また、指によるテクニックのため、トレモロのスピードのコントロールも可能です。この奏法を使用した作曲家はまだ僅かですが、フラッターの限界を補うものとして、大きな可能性を持つものです。